# 茨城県営石岡南台アパート

Ibaraki Prefectural Housing,Ishioka-Minamidai

Mid-rise public housing block with an urban façade

受賞：平成3年度全建賞

所在地：茨城県石岡市

設計：アプル総合計画事務所＋林建築設計事務所

工事監理：茨城県土木部住宅課＋アプル総合計画事務所＋林建築設計事務所

用途：集合住宅(60戸)、集会室

構造設計：花輪建築構造設計事務所

設備設計：遠藤二夫、若松宏

施工：興民建設、若山工務店

敷地面積：8278.2

建築面積：1,893.80

延べ床面積：4,674.00

構造規模：RC柱梁構造、壁構造5階建

竣工：1991.6

写真：新建築写真部

アーバンデザインとしての集合住宅地計画

茨城県の公営住宅を二団地（石岡アパート、松代アパート）設計する機会に恵まれた。私は二つの団地を設計するにあたってテーマとして「アーバンデザインとしての集合住宅

地計画　ということを設定したのだが\* 、ここでは何故、都市的な団地をテーマとしたかについての簡単に触れてみたい。集合住宅は古代ヨーロッパ都市などに既に存在しており、ローマに中層集合住宅が存在し賃貸されていたことが記録に残っている。これらの集合住宅は、都心の街区を構成し、都心地区の基本的要素となっていた。従って集合住宅そのものは必ずしも新しいビルディングタイプというわけではない。しかし現在我々が普通に集合住宅として考えているものは、実はこのような伝統的な都市を構成する集合住宅ではなく、いわゆる近代建築運動（モダニズム）が生み出した集合住宅である。モダニズムは、美学上の革命であると同時に、産業革命によって引き起こされた社会の変革に対応した社会運動でもあった。緑豊かで陽光ふりそそぐ郊外に住まうことを大衆的な理想像としたのは近代社会であったが、誰もがかつての貴族や産業ブルジョワジーのように郊外に豪邸を構えることは不可能であった。郊外にたつ集合住宅は新しく生まれた郊外に都心へ通勤する勤労者のための健康的な住宅を廉価に供給することのできるビルディングタイプであった。モダニズムの建築家たちは、集合住宅地計画を運動の重要な柱におき、それは大成功を収め世界中のあらゆる地域にこのビルディングタイプは広がり、いまやオフィスビルとともに国際的なタイプにまでなったのである。だから近代の集合住宅は本質的に郊外にたつことを前提としたビルディングタイプであり、同じ集合住宅といっても近代以前のヨーロッパなどの諸都市の都心を形作っている街区型の集合住宅とは全く別のビルディングタイプなのである。モダニズムの生み出した集合住宅の典型は板状の住棟を平行に配置したものである。これはどの住戸にも日当たりが良く住棟まわりには緑に溢れているが、その一方建物によってできる外部空間にはまとまりがなく希薄であり、住棟間隔が離れ過ぎて住人間のコミュニケーションも少なく、かつ住戸が全て平等な分およそ一戸一戸のアイデンティティに乏しい。それが住民の不興をかい６０年代から世界中で反省が求められた。その反省の一つの方向は、集合住宅をもっと郊外の戸建て住宅近づけることであり、モントリオール博覧会のアビタ‘６７など一戸の形態的分節を強める方法や７０年代に追求された低層集合住宅の方向に向かった。もう一つの方向が今回私がテーマとした、どちらかといとヨーロッパなどの都市の伝統にあるような都市を構成する要素としての集合住宅を考えることである。これはフランスやイタリアの７０年代以降の集合住宅、８０年代のベルリンの国際住宅展（ＩＢＡ）などに現れている考え方と共通したものである。これまで述べてきたことからわかるように、この考え方は我々が通常集合住宅と呼んでいるものに対する根本的な反省と批判が含まれている。

何故、都市的な集合住宅地を考えなければいけないかという理由は二つある。第一は過半の人々が都市に住むような状況になってくると、物理的に集合住宅をいつまでも郊外に

立地させることができなくなる。都市的な周辺環境の敷地に郊外的な概念に基づく集合住宅を計画することはどうしても無理がある。その無理の端的な現れの一つは日照問題である。これは都心にも郊外的な環境を求めるために引き起こされた軋轢の例である。第二に郊外的なモデルで出来た都市は、都市本来の魅力をつくり出せないということがである。前述のように、郊外モデルは基本的に隣接する棟や道との関係を絶とうとしている。ところが景観的にモアクティビティにおいても都市の魅力というものは建ち並ぶ建物どうし、建物と道との密接な関係に基礎をおいているのである。「アーバンデザインとしての集合住宅地計画」の本質は都心に住むことの魅力を享受することができ、かつ都市という織物を編み出すことができるような集合住宅地計画である。都市の時代にいよいよ本格的に突入する日本に必要な概念であると思っている。

石岡アパート

石岡アパートは総戸数６０戸の団地であり、計画人口７０００人の分譲戸建て住宅を主体とする住宅・都市整備公団のニュータウンの中心部に計画された。ここでは、住棟配置

、建物の高さの決定において、これまでの集合住宅地計画のように住戸ユニットの居住条件や団地内のオープンスペースの都合だけで決めるのではなく、ニュータウン全体のスカイライン、団地周辺の街路空間などをいかに作るかを考えて決定している。また、これまでの閉領域としての「団地」を否定し、少なくとも歩行者にとって構内道路も一般街路と同じ扱いとして都市の織物の一部となることを目論んでいる。

松代アパート

松代アパートは総戸数１２０戸の団地で筑波学園都市に計画されている。ここでは石岡の観点に加え、都市の建築の本質である道と建物の密接な関係を作ろうとした。モダニズムの集合住宅では住棟と道の関係が極めて希薄であり、これは片廊下と住戸の関係にも現れている。住戸の廊下は都市空間の一部である。ここでは三層の住棟を二段重ねした形式をとり、地上面の道の他に第四層に広く変化に富んだ外部通路（「上の道」）を設け、「上の道」とそれに面する住戸のレベルを変え、「上の道」にはエレベーターでも大階段ででも登れる。「上の道」はループになって、いくつかある階段室、大階段とあいまって多様な経路を住民が選択できるようにしている。残念なことは当初「上の道」全体に土を敷きつめ、雑草が生える道とんとして構想していたが、諸般の事情で実現できなかったことである。